

あ

る日、帰宅しようと電車に乗り込むと外国人の姿が目に入った。私はいつものように目をそらし、車両の反対側に足を向けた。だが、ふと振り返ってちらりと見ると、なんと友人ではないか！

「外国人だから無視しようとしたんだけど、なんだ、君か！」振り返ってくれてよかったよ」と友人は笑った。「僕なら絶対に振り向かないからね」

彼は私より長く東京に住んでいて、この街に住む欧米人のある常識に私よりも慣れている。ほかの外国人に会ったら目をそらす——それが暗黙の「ルール」だ。

東京では外国人はマイノリティー同士気軽に言葉を交わし、東京語に花を咲かせていると思うかもしれないが、実際はその逆。欧米人は、できるだけ完璧に互いを避けようとする。私もアジア人からの視線攻撃には「思わず」目をそらす、ときどき出くわす欧米人からは「わざと」目をそらす。

東京に来たばかりのころは、外国人の目を正面から見つめ、彼らの東京体験を自分のそれと比べたい好奇心に駆られた。でも、私もしだいに目をそらすようになった。

日本の田舎から東京に引越してきた友人は、田舎の欧米人同士ではごく当たり前のことをした。「やあ、元気？」と大声で陽気にあいさつしたのだ。だがしめ面を肩をすくめられ、返ってきたのは沈黙だった。私と同じように、彼もすぐに東京の



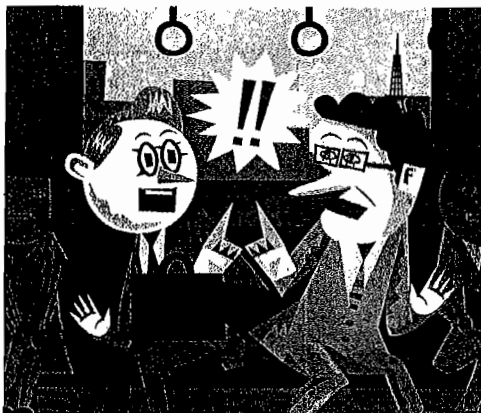
「ルール」に従うようになった。  
でも、実はこのルールは「ふり」だけ。実際は目を

Looking Away

## 仁義なき外国人の戦い 「東京は私の街だ！」

そらすふりをしながらこっそりと、だが念入りに観察している。最初は横目でちらりと見るか、無関心そうにさらりと見る。まじまじとは見ないが実は見ている、というのは東京人の得意技でもある。

私はジムのプールで珍しく外国人を見つけると、ゴーグルを着けたまま絶対に立ち止まらない。でも水中では、すれ違いざまにどんな人だろうとこっそり確認する。水から上がって街に出たほうが、相手が



自分より長く東京にいるかを言い当てやすい。電車の中で変な場所に立っていたり大声で話していたら、まず新参者だ。もっと正確な「テスト」もある。彼らが私を見ようともしなければ、東京歴では相手が上だ。

「隠れ家」を乗っ取られた夜

だがときには、このルールが通じないこともある。ある夜のこと、こちんまりとしたブルドッククラブに入ると、踊りながら

ールを飲む20人ほどの外国人に目をとまっていた。どこに目をそらしたらいいんだ！彼ら弁護士グループは仲間のバースデーで盛り上がり、いつものルールを忘れていた。その夜は気さくに話をして過ごしたが、

「私の」ブルドッククラブに欧米人がたくさんいるという居心地の悪さが抜けなかった。それまで何度も通っていた東京の小さな隠れ家で、私の「領土」が侵食されたのだ。もちろん東京の公共の場所で自分の縄張り主張することなどできないが、この街で発掘したエキゾチックな秘密を自分だけで独占したいという欲望は強いものだ。

私は今でも思わぬ場所でも外国人に出くわすと、「ここで何をしているんだ！」と言いたくなる。まるで19世紀のアフリカで自分と同じようにヘルメットをかぶった探検家に出くわしたように。本当は、「東京は私の街だ！」と叫びたい。私は未踏の土地に降り立った勇敢な探検家。だがこのファントジーは、自分以外の外国人の登場で一瞬にして破壊されてしまう。

とはいえ、欧米人と話すのが楽しいときもある。ある冬の日、私と妻は群馬県の秘湯で外国人カップルに出くわした。夜の露天風呂で4人は素晴らしい会話を楽しんだ。ちようちんの光で雪がきらめき、小川の流れる音が聞こえた。美しい時間だったが、再現するのはむずかしいだろう。東京で彼らとばったり再会しても、私たちはきっと目をそらす——それがルールだから。 **N**

マイケル・プロンコ

60年、カンザスシティ生まれ。明治学院大学准教授。専門はアメリカ文学と文化。著書に『東京の味方です』(メテオ出版)がある。